

えをあらそう様に候事に候へば、いくそばくぞ御内の人々そねみ候らんに、度々の仰をかへし、よりよりの御心にたがはせ給へば、いくそばくのざんげんこそ候らんに、度々の御所領をかへして今又所領給はらせ給と云。此程の不思議は候はず。此偏に陰徳あれば陽れたる報ありとは此也。我主に法華経を信じさせまいらんとをぼしめす御心のふかき故か。阿闍世王は仏の御怨なりしが、耆婆大臣の御すゝめにて法華経を御信じありて代を持給。妙莊嚴王は二子の御すゝめにて邪見をひるがへし給。此又しかるべし。貴辺の御すゝめにて今は御心もやわらがせ給てや候らん。此偏に貴辺の法華経の御信心のふかき故也。

根ふかければ枝さかへ源遠ければ流長と申て、一切経は根あさく流ちかく、法華経は根ふかく源とをし、末代悪世までもつきささかうべしと、天台大師あそばし給へり。此法門につきし人あまた候しかども、をほやけわたくしの大難度々重なり候しかば、一年二年こそつき候しが、後々には皆或はをち、或はかへり矢をいる。或は身はをちねども心をち、或は心はをちねども身をちぬ。釈迦仏は淨飯王の嫡子、一閻浮提を知行する事、八万四千二百一十の大王なり。一閻浮提の諸王頭をかたぶけん上、御内に召つかいし人十萬億人なりしかども、十九の御年、淨飯王宮を出させ給て檀特山に入て十二年、其間御ともの人五人なり。所謂拘鄰と頗鞞と跋提と十力迦葉と拘利太子となり。此五人も六年と申せしに二人は去ぬ。残の三人も後の六年にすて奉て去ぬ。但一人残給てこそ仏にはならせ給しか。法華経は又此にもすぎて人信じがたかるべし。「難信難解」此也。又仏在世よりも末法は大難かさなるべし。此をこらへん行者